

※本記事は、m3.comから許可を得て掲載させて頂いております

医療維新

シリーズ **最終講義** »

医療維新

九大・前原教授「人格を磨き、社会に貢献する外科医育成を目指した」

最終講義、約15年間に26人の教授を輩出

レポート 2018年3月27日(火)配信 大西裕康 (m3.com編集部)

九州大学大学院消化器・総合外科（第二外科）教授の前原喜彦氏は2月16日、同大学院の講義棟臨床講堂で最終講義をした。テーマは「外科学の進化」。同科教授に就任した2002年10月以来、約15年間に輩出した人材のうち26人は教授に就任。学位取得者は161人に上る。自身の15年間については、同教室訓だという「一に人格、二に学問」を引用し、「人格を磨き、社会に貢献する外科医へという思いで取り組んでいた」と振り返った。9つの疾患領域ごとに同教室の115年に渡る歴史と、最新の研究や治療法開発なども説明した。



最終講義後の記念撮影

前原氏は1977年3月九州大学医学部卒業。1995年4月に米国のハーバード・メディカルスクールのダナ・ファーマーがん研究所で働いた2年間を除くと、研修医時代から九大一筋の人生を歩み、教授に就任後は2012年4月に同大病院救命救急センター長兼任、2013年5月に同小児救命救急センター長兼任、2014年4月に同集中治療部長兼任を経て、2015年10月には同大学院医学研究院主幹教授に就いた。外科医としての歩みについては、「倫理観の高い外科医の育成」「外科医療の実践と外科研究の推進」「社会への提言」の3つに分けて語った。

倫理観の高い外科医の育成

倫理観の高い外科医の育成については、医療人の生涯を「人類への奉仕の生涯」「自分への厳しさが求められる生涯」「休むことのない生涯」の3つで表現し、「医療人は労働者でもあり経営者でもあるが、『守命者=命の番人』としての自覚と社会的な認識が必要」と説いた。また、日本で最も古い平安時代の医学書、「医心方」（全33、丹波康頼著、横佐知子訳）の原文と現代語訳を朗読し、「1000年前の文章とはとても思えないが、また同時に医療の心は1000年経っても変わらないということだと思う」と述べた。

『医心方』 現代語訳

医師が患者さんの治療にあたる時は、必ず心静かに精神を統一し、何かを欲したり求めたりすることなく、患者さんを慈しみ、いたわる心で、生命あるものを病氣から救いたいと念じなければならぬ。

もし病氣にかかった者が来て救いを求めるならば、誰にでも同じような態度で、親子を思うような態度で接しなくてはならない。患者さんの苦悩を見ては、自分の出来事のような気持ちで悲しみ、辺鄙な場所や険しい山中だといって患者さんのもとに行くのを避けてはならない。疲れていても、空腹のどが渴いていても、一心に赴いて救い、自分の利益や名誉を考慮してはならない。

（広島東洋古典医学研究会訳を改変）

（前原氏提供）

また、華岡青洲による乳がん手術成功第一例目が、1804年11月14日の記録が残っていることで世界初の成功例としても認識されている点などに触れ、「温故知新」や自身の行動を振り返る意味で「記録」の重要性を強調。また、ランセット誌を取り上げ、「メスの剪刀を意味する単語が、どうして世界最高峰の医学誌の名前になっているのか。われわれの学問は患者さんに人為的侵襲を加えることで成り立つ。そういう意味で、抗がん剤治療や遺伝子治療も『見えない剪刀』だ」と述べ、常に侵襲を加えているという意識を持たなければならないと語りに力を込めた。一方、学習方法について言及した場面では、効率の良い順が(1)指導する、(2)体験する、(3)討論する、(4)発表する、(5)本を読む、(6)講義を聴く——になると説明し、「皆さんが今、行っている行動は一番効率が悪いのです」と述べ、最終講義の会場を埋め尽くした聴講者を笑わせた。

実践と研究の相乗効果が重要

れた上で「手術のときに検出したPD-L1の発現と、再発のときの効果を見ると相関がある。再発症例に対し、1回目の手術時に検出したPD-L1の評価で、免疫チェックポイント阻害剤の効果を予知できる可能性が示唆されていると思う」と明かした。肺移植については、認定施設になるため既に認定施設の千葉大学と連携している状況なども紹介した。

乳がんは1922年1月から2202例（同）を記録。最も予後の悪い分子の発現を世界で初めて報告した経験に触れた上で、「細胞がどのようなシグナルを持っているのかが分かれば、新しい治療法の構築につながっていくだろうと思っている」と述べ、研究を進める考えなどを示した。動脈瘤・閉塞性動脈硬化症に関しては、松山日赤病院と協力してVGF-2遺伝子による虚血肢治療剤の開発を進めていると明かし、「世界初の遺伝子治療になる可能性もあると思う」と意欲を示した。

日本学術会議・委員長として2つの提言を公表

社会への提言では、日本学術会議での取り組みを紹介。2つの提言、「我が国におけるがん創薬を目指した基礎研究の推進と臨床試験体制の整備について」と「我が国における臓器移植の体制整備と再生医療の推進」を取りまとめた委員長を務めた。

最後は、教授15年を支えてくれた論語の言葉として「歳寒うして 然る後松柏の彫（しば）むに遅るるを知る（平生の修養を怠らないものは 太平無事の時は目立たないようであっても 大事に遭遇した時に真価を発揮するものだ）」を紹介。教授在任中、共に働いた教室員として計301人の名前を一覧で示し、謝辞で締めくくった。



(前原氏提供)

【前原喜彦・九州大学教授へのメッセージ募集中！】

前原先生の教えを受けた方や、一緒に仕事をされた方など、ご縁のある皆様、最終講義を終えた先生にメッセージを贈りませんか。[ぜひこちらから、ご投稿ください!](#) (匿名でも、実名でも可能です)

※お寄せいただいたメッセージの一部は、m3.com上に掲載することを予定しておりますので、あらかじめご承知おきください。